

15

14

13

12

K A P P A N O V E L

長編推理小説

点と線

松本清張



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 点 と 線

昭和 35 年 7 月 10 日 初版発行

昭和 46 年 5 月 20 日 126版発行

検印廃止 辛 350

著 者 まつもと せい ちやう
松 本 清 張
東京都杉並区上高井戸 4-1762

発 行 者 五 十 嵐 勝 彌

印 刷 者 堀 内 文 治 郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀 内 印 刷

発 行 所 東京都文京区音羽 2 株式会社 光 文 社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。〔関川製本〕

表紙の模様・意匠登録 116613

© Seityō Matumoto 1960

点と線

まつもと せいちょう
松本清張



カッパ・ノベルス



東京駅構内で取材する松本清張氏（日本交通公社提供）

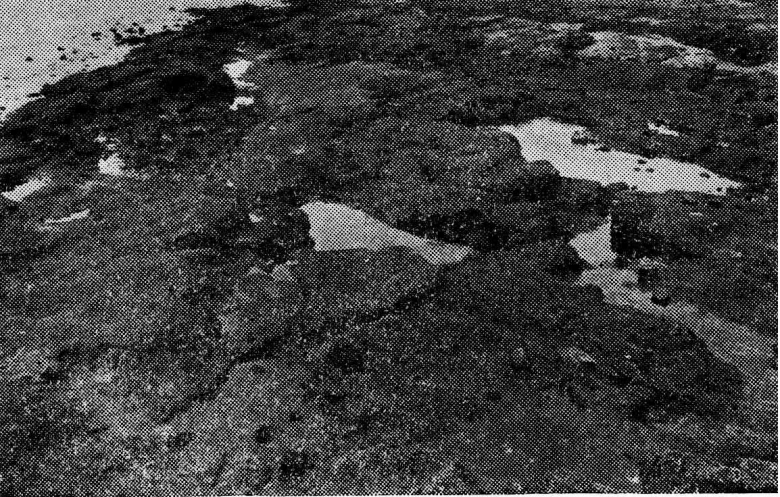


朝の東京駅・丸の内北口

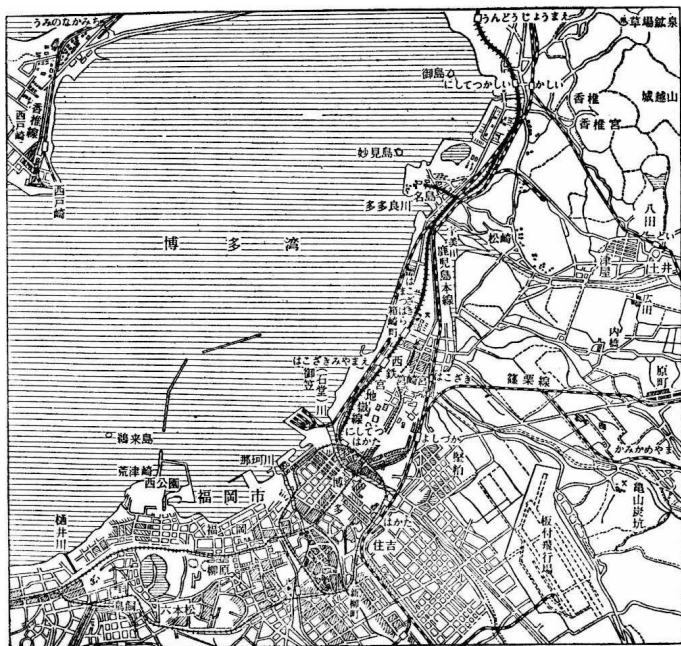
点と線 目次

目撃者	5
情死体	20
香椎駅と西鉄香椎駅	37
東京から来た人	54
第一の疑問	72
四分間の仮説	87
偶然と作為の問題	102

北海道と九州	111
数字のある風景	127
北海道の目撃者	142
崩れぬ障壁	154
鳥飼重太郎の手紙	183
三原紀一の報告	205



かしい
香椎海岸（西日本新聞社提供）



九州博多地方

一 目 撃 者

1

安田辰郎は、一月十三日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した。客の正体は、某省のある部長である。

安田辰郎は、機械工具商安田商會を經營している。この会社はここ數年に伸びてきた。官庁方面の納入が多く、それで伸びてきたといわれている。だから、こういう身分の客を、たびたび「小雪」に招待した。

安田は、よくこの店を使う。この界限では一流とはいえないが、それだけ肩が張らなくて落ちつくという。しかし座敷に出る女中は、さすがに粒が揃っていた。

安田はここではない客で通っていた。むろん、金の使い方はあらい。それは彼の「資本」であると言っていた。客はそういう計算に載る人びとばかりであった。もつとも、彼はどんなに女中たちと親しくなっても、あまり自分の招待した客の身分をもらしたことはなかった。

現に、去年の秋から某省を中心として不正事件が進行していた。それには多數の出入り商人がか

らんでいるといわれている。現在は省内の下部の方だが、春になればもっと上層へ波及するだろうと新聞は観測していた。

そういう際でもあった。安田はさらに客について用心深くなった。客によっては、七度も八度も同じ顔があった。女中たちはコーさんとか、ウーさんとか言っているが、素性は全然知らされなかった。が、安田の連れてくる客のほとんどが、役人であるらしいことは、女中たちは知っていた。しかし、招待客はどうでもよい。金を使うのは安田であった。「小雪」は、彼を大事にしておけばよかった。

安田辰郎は四十ぐらいで広い額と通った鼻筋をもっていた。色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。人ながらも商人らしく練れて、あっさりしている。女中たちには人氣があった。しかし安田はそれに乗って、誰に野心があるというでもなさそうだった。彼は誰にたいしても、同じように愛想がよかった。

係の女中は、はじめ当番をもった因縁で、お時さんかになっていたが、座敷だけの氣やすさで、それ以上に出る模様もなさそうだった。

お時さんは、二十六だか、年齢を四つぐらい若く言ってもいいくらいに、色が白くてきれいである。黒瞳の勝った大きい目が客に印象を与えた。客に何か言われて、微笑を含んだ上目使いで睨む表情が相手をよろこばした。当人はそれを心得てする仕ぐさであろう。瓜実顔で、唇とあごの間

がせまく、横顔がきれいだった。

それくらいだから、客の中には誘惑する者もあったらしい。この女中はみんな通いである。午後四時ごろに出てきて十一時すぎには帰る。その帰りを待つて、新橋駅のガード下あたりに来てくれと誘う者がある。客の言うことだからすげなくは断われない。ええ、いいわと返事して、三回も四回もすっぱかしてしまふ。彼女に言わせると、それでたいてい察しをつけてほしい、のだそうである。

「血のめぐりの悪いくせに怒ってんのよ。このあいだお座敷に来て、いやと言うほどつねるのよ。」お時さんは、すわったまま、着物をめくってちらりと膝を朋輩に見せた。白い皮膚の上に、うす青い痣のようなものが一点に鬱血していた。

「ばかだな。君があんまり気を持たせるからさ。」

と安田辰郎は、その場で杯を含みながら笑って言った。つまり安田は、それだけ気のおけない客になっていた。

「そういえば、ヤーさん、ちつともあたしたちをくどかないわね。」と、女中の八重子が言った。

「くどいてもはじまらんよ。どうせ肩すかしをくう組だからな。」

「やあい、あんなことを言ってる。あたし、ちゃあんと知ってるわ。」

と、かね子がはやした。

「おいおい、変なことを言うなよ。」

「だめよ、かねちゃん。」

と、お時さんが言った。

「この女中は、みんなヤーさんに惚^ほれてるんだけど、ちつとも振りむいてもらえないのよ。かねちゃん、早いところあきらめなさいな。」

「へーんた。」かね子は、歯を出して笑った。

じっさい、お時さんの言うとおりに、「小雪」にいる女中は、多少とも安田に興味を抱いていた。くどかれたら、考えてみる気になるかもしれない。それだけの女好きのする魅力を、安田の顔と人からは持っていた。

だから、その晩、某省の役人の客を先に玄関に見送って座敷に帰った安田か、もう一度くつろいで飲みなおして、ふと、

「どうだい、君たち、明日、飯^{めし}をご馳走^{ちそう}してやろうか？」

と言ったとき、そこにいた、八重子ととみ子が、一も二もなくよろこんで承知した。

「あら、お時さんがいないわ。お時さんも連れて行ってあげてよ。」

とみ子が座敷を見まわして言った。お時さんは、何かの用事で出て行っていた。

「いいよ。君たち二人でいいよ。お時さんはこの次にしよう。あまり大勢で空けたら悪いよ。」

それはそのとおりだった。女中たちは四時には店にはいらねばならない。夕飯をおごってもらえは遅くなる。三人も遅れたのではまずいにきまつていた。

「じゃ、明日、三時半に、有楽町のレバンテにこいよ。」

安田は、目もとを笑わせながら言った。

2

翌日の十四日の三時半ごろ、とみ子がレバンテに行くと、安田は奥の方のテーブルに来て、コーヒーを飲んでいた。

「やあ。」

と言って前の席をさした。店で見なれている客を、こんな所で見ると、気持がちよつとあらたまつた。とみ子はなんとなく頬を上気させてすわった。

「八重ちゃんはまだですの？」

「もうすぐ来るだろう。」

安田は、にこにこして、コーヒーを言いつけた。五分もたたないうちに、八重子も、妙に恥ずかしそうにしてはいって来た。近くには若いアベックが多く、一目でその方の勤めと知れる二人の和装の女は目立った。

「何をご馳走しよう。洋食か、天ぷらか、鰻か、中華料理か？」安田はならべた。

「洋食がいいわ。」

二人の女はいっしょに返事した。日本食の方は、店で見あいているらしかった。

レバンテを出ると、三人は銀座ぎんざに向かった。この時間なら、銀座もそう混んではない。天気はよかったが、風は冷たかった。ぶらぶらと歩いて、尾張町おわりちょうの角から松坂屋まつざかやの方に渡った。二週間前の年末と打って変わって、銀座も閑散かんさんだった。

「クリスマスの晩はすごかったわねえ。」

安田のすぐ後で、二人の女はそんなことを言いあっていた。

安田は、コックドールの階段をのぼった。ここも空すいていた。

「さあ、なんでも好きなものを言いたまえ。」

「なんでも結構だわ。」

八重子もとみ子も、いちおう遠慮したが、やがてメニューをかかえて相談しはじめた。なかなか決まらなかった。

安田は、腕時計をそっと見た。八重子がそれを目ざとく見つけて、

「あら、ヤーさん。おいそかしいの？」

と目を向けた。

「いや、いそがしくはないが、夕方から鎌倉に行く用事がある。」

安田が卓の上で指を組んで言った。

「あら、悪いわ。じゃ、とみちゃん、早く決めましょうよ。」

それでようやく決定した。

スーパからはじまったから、料理が終わるまで、かなりの時間をとった。三人はとりとめのないことをしゃべりあった。安田はたのしそだった。フルーツが出たとき、彼は、また時計を見た。

「あら、お急ぎになるんじゃない？」

「いや、まだ、いいよ。」

安田はそう答えた。しかし、つぎのコーヒーが出たとき、彼はもう一度、カフスをめくった。

「もう、お時間でしょう。失礼しますわ。」

と、八重子か腰を浮かしそうに言った。

「うん。」

安田は、煙草をすいながら、目を細めて何か考えるようにしていたが、

「どうだい、君たち。このまま別かれるんじや、おれ、ちよつと寂しいんだ。東京駅まで見送ってくれよ。」

と言いだした。半分、冗談じやうだんともつかず、本気ともつかぬ顔つきだった。

二人の女は顔を見あわせた。彼女らも、いいかげん、店にはいるのが遅れている。この上、東京駅に行つて来たのではもつと遅れる。しかし、このとき、安田辰郎の表情には、さり気なさそうにしているが、妙に真剣なものがあつた。ほんとうに寂しいのかな、と女たちは思ったほどだった。それにご馳走になつた手まえ、すげなく突っぱなすのも悪い気がした。

「ええ、いいわ。」

と先に思い切つたように言つたのは、とみ子だった。

「お店に、もう少し遅くなるからと、電話で断わつてくるわ。」

そう言つて、彼女は電話のある方へ立つて行つたが、まもなく、にこにこして戻つて来た。

「なんとか言つておいたわ。じゃ、お見送りに行きましょう。」

そうか、悪いな、と言つて安田辰郎は立ちあがつた。このとき、彼はまた腕時計を出した。よく時計を見る人だと女たちは思った。

「何時の電車にお乗りになるの？」

八重子がきいた。

「十八時十二分か、その次に乗りたい。今、五時三十五分だから、これから行けばちょうどいい。」

安田はそう言いながら、せかせかと勘定を払いに歩いた。

車は駅に五分ぐらいで着いた。車のなかで、安田は、

「すまんなあ。」

とあやまっていた。八重子もとみ子も、

「いいわよ。ヤーさん。これぐらいのサービスしなきゃ、こちらが悪いわ。」

「そうよ、ねえ。」

と言っていた。

駅につくと安田は切符を買い、二人には入場券を渡した。鎌倉の方に行く横須賀線は十三番ホームから出る。電氣時計は十八時前をさしていた。

「ありがたい。十八時十二分にまに合うよ。」と安田は言った。

だが、十三番線には、電車かまだはいっていないかった。安田はホームに立って南側の隣のホームを見ていた。これは十四番線と十五番線で、遠距離列車の発着ホームだった。現に今も、十五番線には列車が待っていた。つまり、間の十三番線も十四番線も、邪魔な列車がはいっていないので、このホームから十五番線の列車が見とおせたのであった。

「あれは、九州きゅうしゅうの博多行の特急だよ。あさかぜ号だ。」

安田は、女二人にそう教えた。

列車の前には、乗客や見送り人が動いていた。あわただしい旅情のようなものが、すでに向かい側のホームにはただよっていた。

このとき、安田は、

「おや。」

と言った。

「あれは、お時さんじゃないか？」

え、と二人の女は目をむいた。安田の指さす方向に瞳ひとみを集めた。

「あら、ほんとうだ。お時さんだわ。」

と、八重子が声を上げた。

十五番線の人ごみの中を、たしかにお時さんが歩いていった。その他所行よそゆきの支度といい、手に持ったトランクといい、その列車に乗る乗客の一人に違いなかった。とみ子もやっとそれを見つけて、

「まあ、お時さんが！」

と言った。

3

しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、傍そばの若い男と親しそうに何か話していることだった。その男の横顔は、彼女たちに見おぼえがなかった。彼は黒っぽいオーバーを着て、これも手に小型のスーツケースをさげている。二人は、ホームの人の群むれの間を、見えたり隠れたりして、ちらちらしながら列車の後部の方に向かって歩いていった。

「まあ、どこに行くんでしよう？」

八重子が息をのんだような声で言った。

「あの男の人、誰でしょうね？」

とみ子もかすれた声を出した。

三人の目にさらされているとは知らずに、お時さんは、連れらしい男といっしょに歩いていたが、やかて一つの車両はこの前に立ちどまって、列車の車両番号を見ていたが、ついと男の方から先に内部なにかにはいつて、姿を消してしまった。

「お時さんも、なかなか隅におけないね、彼氏と九州まで旅行するのかな？」

安田は、一人でにやにやしていた。

二人の女は、まだ棒のように立っていた。びっくりした表情が、まだ顔からさめていない。お時さんが姿を消した車両を見つめて声をのんでいた。その前には絶えず旅客が動いている。

「お時さんは、いったいどこへ行くのかしら？」

八重子がやっと言った。

「特急に乗るなんて、近い所じゃないわね。」

「お時さんにあんな人がいたの？」

とみ子が声をひそめた。